

観峰館 夏季企画展

きれいな字

—近代中国と日本の書—

会期…二〇二三年七月二日（土）～九月四日（日）

会場…新館 特別展示室

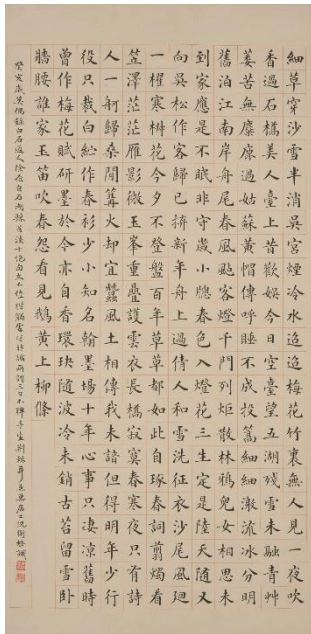
主な展示作品

1 沈衛 (一八六二〜一九四五)

かいいしよ きようきじよやにせきじよりしうけいにかえるこじく

楷書姜夔除夜自石湖归苕溪詩軸

中華民國十二年(一九二三)



いっかく ていねい かいしょ
 一画ずつ丁寧に書く「楷書」で書かれた作品です。一文字の大きさはおよそ三センチメートルで、紙に引かれた野線の中に文字を並べて書いてあります。

らっかん ふく
 左側の落款(書いた年や作者名)を含めると、書かれている文字の数は三〇〇を越えます。書き始めから終わりまで、バランスを崩さずに全ての文字を書き上げている見事な作品です。

12 陸潤庠 (一八四二〜一九一五)

ぎようしよ しちごん ついれん

行書七言對聯

清時代後期



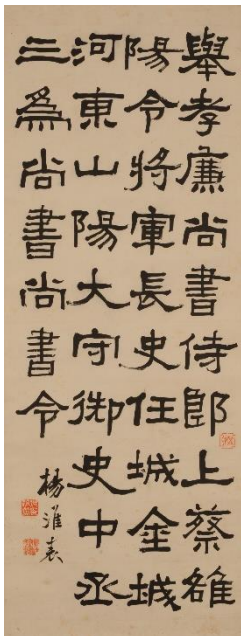
はや れんぞく
 文字を速く書き上げるために、点画を連続／省略する「行書」で書かれた作品です。この作品も、「松」の木へんが省略されていたり、「花」の草かんむりの形が変わっていたりします。手描きの模様が入った蠟箋に書かれており、線は太めで重量感がありますが、紙がつややかに加工されているために、筆運びは滑らかです。

22 張祖翼 (一八四九〜一九一七)

れいしよりんよう わいひようきじく

隸書臨楊淮表紀軸

清時代末期 光緒二十九年(一九〇三)

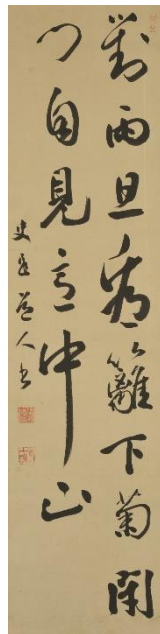


りんしよ
 手本を見て書き写すことを「臨書」と言います。この作品は、後漢時代(二五〜二二〇)の《楊淮表紀》という石碑の文字を書き写したものです。扁平な字形と波磔(波打つようなハライ)は後漢時代に使われた隸書という書体の特徴です。線には、毛筆ならではのニジミやカスレがよく出ており、独特の躍動感があります。

36 辻本史邑（一八九五～一九五七）

行書七言對句軸

昭和時代



しちごんにく
七言二句の一四文字を、行書と草書（文字を速く書くために簡略化された書体）で二行に書いた作品です。「中」の最終画を長く伸ばす等、文字の大きさにはかなりの変化がありますが、カスレの少ない線を用いることで、紙面全体は落ち着いた雰囲気にとまっています。左側に書き添えられた署名や印の位置も絶妙です。

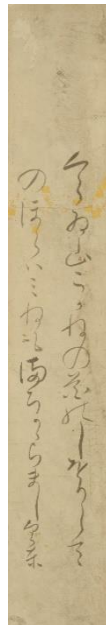
すべての展示作品解説は、
下記からご覧いただけます。



42 野村望東（一八〇六～一八六七）

和歌短冊「くらゐ」

江戸時代後期



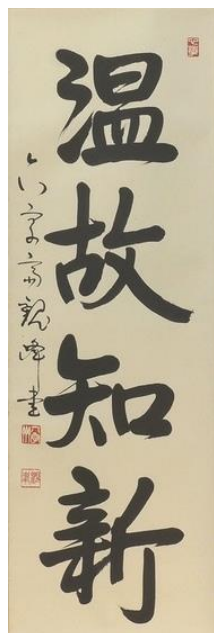
細身の線で和歌を書いた短冊です。一行目に上の句（五／七／五）、2行目に下の句（七／七）が書かれています。

墨をつけた部分は線がやや太くなり、書き進めるにつれて墨が減り、線が痩せてきます。線の自然な肥瘦（太さと細さ）が見どころの逸品です。筆先が軽快に回転するところや、ゆらぎながら線が引かれるところ等、線には色々な表情があり、見ている者を飽きさせません。

48 原田観峰（一九二一～一九九五）

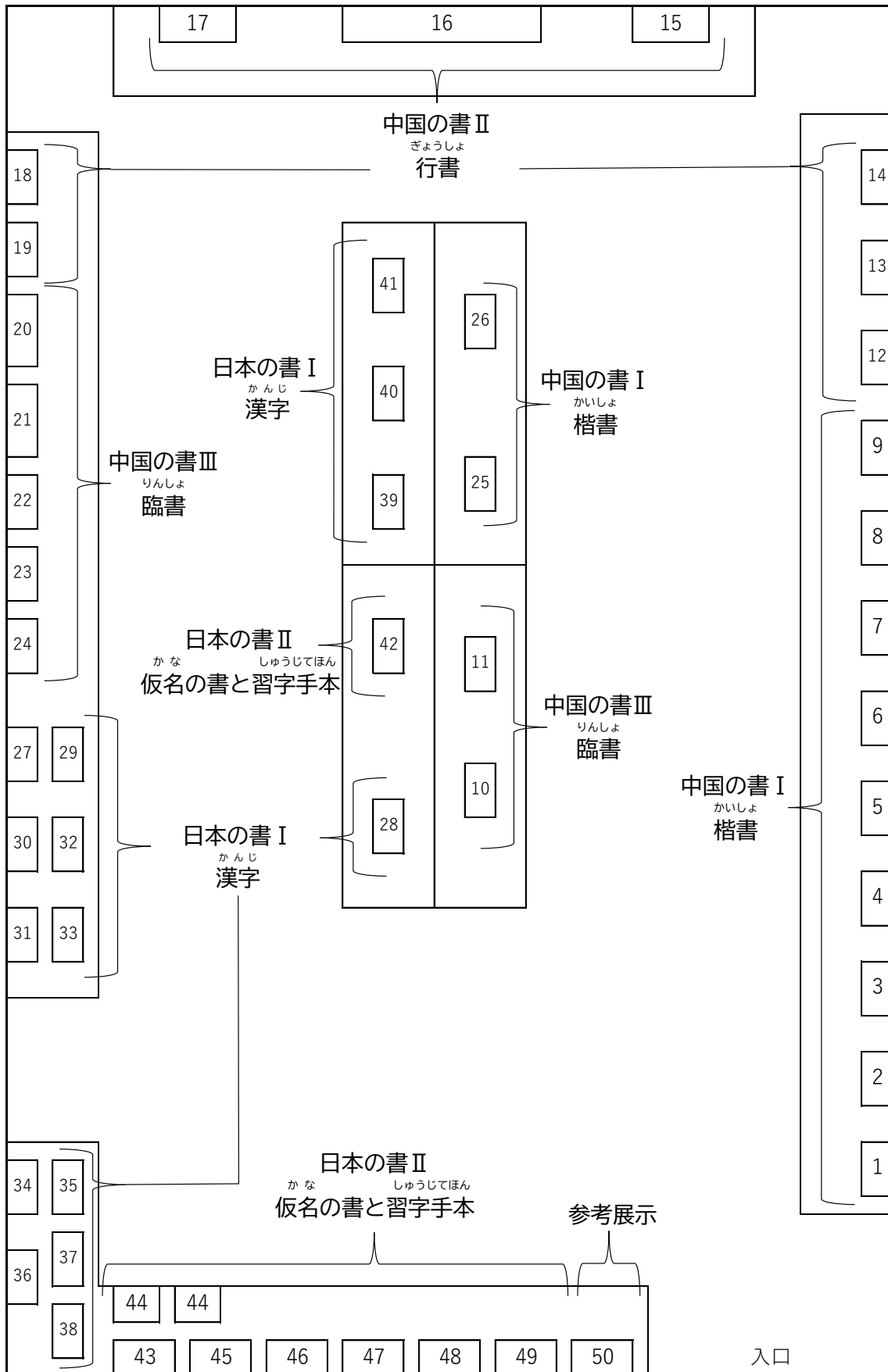
温故知新軸

昭和時代



「温故知新」とは「故きを温ねて新しきを知る」と読み、過去の事実を研究し、そこから新しい知識や見解をひらくことを意味します。肥瘦の少ない柔らかな線と、安定感のある字形で書かれた作品です。筆者の原田観峰は、様々な書を学び、書道教育に半生を尽くしました。本作に見られる線や字形の特質は、観峰が執筆した習字手本にも共通するものです。

展示室内のご案内



※番号は展示リストと対応しております。